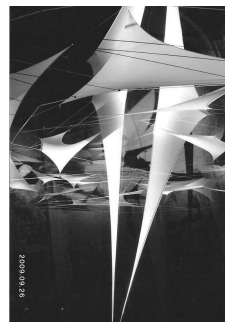




“纏”コレクションより

国際天然繊維年コレクション  
2009・ローマよりテキスタイルアート  
インスタレーション  
イタリアCOMO“PAPER FASHION”  
展示ポスター・アントワープ

いるのだという実感と圧倒的なスケール感を受けました。心打たれたのはビジネスだけでなく地元子ども達への楽しいワークショップ等も企画し心の触れ合いを大切に行っていることでした。数値のみを追いかけてきた日本ビジネスのあり方も反省の時を迎えているのを感じました。ベトナムはフランスの植民地統治や長いベトナム戦争の悲劇がありましたが、やっと手に入れた自分達の国づくりに懸命な努力を惜しまない若いエネルギーの漲る国だと思いました。

### ● 2009年 国際天然繊維年がローマから発信されました。

天然繊維を使用したファッションショーが4月イタリアのスタイリスト達によって開催されるなど諸々のイベントが企画されヨーロッパ各地にも波及しました。日本事務局でもポスターを関係機関に配布すると共に10月25日には“パシフィコ横浜”でシンポジウムを開催しました。

偶然京都では現代の布市場、染織のための自然素材展Ⅲが企画され、絹、からむし、和棉、葛布、しな布等、諸々のつくり人による織物等が披露されました。15年前には東京にも41軒あった養蚕農家も今は8軒になりましたが、第7回東京シルク展では特別企画として“蚕糸・絹文化シンポジウム”が多摩シルクライフ21研究会と財団法人大日本蚕糸会との共催で開催されるなどそれぞれの思い入れが伝えられたと思います。化学繊維の必要性が日常化する時代の中で、改めて天然のもつ繊維素材が見直された年でもあったと思います。

2008年、中国瀋陽で国際野蚕学会が開かれ周辺の山林に生息する野蚕の飼育状況と製品化の現場を見学する機会をえましたが、その大きな美しい自然の蚕に見とれながら日常の便利さの中で忘れかけていた温もりや安らぎの感触を思い出しました。人間がマシン化しない限りこの理屈を越えた郷愁を捨て去ることは出来ないことを悟りました。コットンやウール等の素材が時代を超えて求められるのも同様ではないでしょうか。

### ● PAPER FASHION展（アントワープ モードミュージアム）

紙と衣服の関わりには日本に古い歴史があり奈良二月堂の神事には、今も紙衣が用いられています。江戸時代には紙布の利用が流行したことも聞いています。それ等が今日のテクノロジーの中で王子製糸の“オージョ”にまで至っています。ペーパーファッション展がベルギー・アントワープのモードミュージアムで開催されました。アトポスで知られるギリシャのキュレーター ジディ・アナキス氏による企画でした。彼は2004年に“ブリーツ”をテーマにした企画展で世界に知られたユニークな視覚と行動力をもつ逸材です。ドイツで発展した人工紙ですが、戦後アメリカの消費指向の中で使い捨てカーテンや旅行衣服等がもてはやされ、Tシャツ等にも出回りました。三宅一生氏も1982年パリの秋冬コレクションで手漉き和紙による紙衣のシリーズを発表し、更に1984年油紙のレインコートも製作していますが、改めて紙と衣服との関わりを考えさせられました。竹紙やとうもろこし、ケナフ、バナナ繊維の布などエコロジーとナチュラル嗜好の中で興味をもたれているのでしょうか。

その他、紙とアート、建築、I.D.等にかかわる仕事への関心も各地にありましたが、ニューヨークのMuseum Of Arts & Design の美術館でも“Paper Under The Knife”と云う大変面白い題で切り紙によるユニークな展覧会をみました。